

文字による表現の指導

木村宗男

「筆が立つ」ということばがある。広辞苑によると、「文章を書くのが巧みであること」とある。どのような文章が書けることを「巧みである」とするかは、時代とともに移り変ってきたと思われるが、今日では、表現意図を相手に対して最も効果的に伝える文章を、比較的短時間に書く能力を有することを言うのであろう。そのような文章表現能力を育てるための指導は、今日各国の国語教育で重要な科目として取り扱われている。外国人に対する日本語教育でも、意志の表現、思考内容の伝達を文字によって行なうことが重要な技能として学習目標の一つに掲げられていることにかわりはない。しかし、外国人の日本語における場合は、日本人の国語における場合とちがって、種々の難問題が障害として横たわっている。そのような障害を取り除きながら目標に到達させるには、どんな手順を踏んで指導を積み重ねていかなければならないか。それをこれから考えてみようと思う。

題目に「文字による表現」という耳慣れないことばを使ったのは、「口頭表現」に対立する概念を表わす意図による。以下略して「文字表現」とすることもある。

I 外国人学生の文章に見られる諸問題

はじめに外国人学生が書いた作文から、伝達の障害になる誤りを取り出して概観してみよう。

1. 文字

漢字を常用しない国から来た外国人学生の書いたものには、一般的に文字の誤りが多い。かれらにとって慣れない日本文字を正しく使うことは容易でないことは理解できるが、誤字・脱字・あて字などの不正表記によって、文字表現の効果が減殺されることは否定できない。したがって、文字表現の問題の中で文字の誤りは外国人の場合といえども寛大に見のがすことはできない。いま、手元にある学生の書いた文章から文字に関する誤りを集めてみると、つぎのようなものがある。

(1) 不完全・不正確な漢字、形の整わないかな・漢字。筆記試験で、かなを漢字に書きかえさせる問題や、教室での書き取りなどでよく見られるのと同じ誤りである。

(2) 不正確な発音の習慣からくる誤記。母音、子音、音の長短、つまる音、はねる音、清音と濁音・半濁音、拗音など、その学生が話すときの発音上の誤りがそのまま文字に書き記されている。

(3) 外来語の誤記。これも発音と関係があるが意外に多く見られる誤りである。

(4) あて字、漢字の誤用。日本人の場合にも見られる、もっともらしいあて字のほか、漢字の音訓と意義との遊離からくる誤りが多い。

(5) 中国語の簡体字。中国人の学生が、机(機)、电(電)、观(観)、际(際)などを使用した場合、日本語としては誤りとしなければならない。

2. 文体

口頭表現の習慣から、どんな種類の文章でも「です・ます」で書く者が多い。また、「です・ます」と「である」とを混用する者も多い。学生がかつて読んだことがあるのか、または文章を書くときに何かから取ったのか、文語体や美文調が前後と調和しないで使われることもある。手紙の場合には敬語が問題になる。簡潔で正確な文章を統一された文体で書くということが、なかなかむずかしい。

3. 語句

一般に語彙不足のため、適確な表現ができず、文がだらだらと長くなる傾向がある。また、慣用表現を使わないために表現効果が弱まることが多い。これらを補うには、読解教材によって語彙を豊富にするよりほかない。そのほか、語句に関してはつぎのような問題がある。

- (1) 語句の意味を誤って使ったもの
- (2) 記憶あいまいな語句を使ったための誤り
- (3) 同音語・類音語・類義語による誤り
- (4) 語法を無視したもの
- (5) 母国語からの類推による誤り

4. 文法

文字表現で文法に関する誤りが多いことは口頭表現の場合と同様である。口頭表現では、対話の相手に助けられて、文法の誤りを訂正しながら話すこともできる。そのような習慣を持つ学生が文章を書くと、口頭表現での文法の誤りがそのまま文字になってしまうのであろう。文字表現では、初歩的な文法の誤りのために、内容に対する評価までも低くされることが多いから、つぎにあげるような文法上の誤りを犯さないよう指導しなければならない。

- (1) 主語・述語のねじれ
- (2) 助詞の誤用
- (3) 活用語の活用の誤り
- (4) 自・他動詞の混同
- (5) 形容動詞と名詞との混同
- (6) 述語と呼応しない副詞の使用、または副詞の位置が適当でないもの
- (7) 接続詞・接続助詞の誤用

5. 母国語の発想による日本語らしくない表現

母国語的な発想による表現がたまたま新鮮な表現効果を生じることがある。「友だちのおじさんのうちで日本の毎日の生活を楽しんでいます。」という文はいいが、同じ学生(初級英語国民)による「友だちが私を国立劇場へ歌舞伎を見につれて行きました」となると、日本語らしくない表現と言わなければならない。外国語的な表現が効果をあげるということは、その表現が日本語の文法から見て正しく、かつ日本語の待遇表現などの約束ごとにそむかない場合に限られるようである。

II 基礎能力の養成

文字によって意志・思考内容を伝達するということは、上級の段階になってはじめて、まがりなりにもできることであるが、文字表現の基礎的能力は初級・中級のあいだに養っておかななければならない。口頭表現に習熟し、読解能力を持っていても、それだけでは文字表現を十分に行なうことはできない。文字によって読むばかりでなく、それを使って書くことを早くから習慣づけなければならない。ふつう、文字を教える場合、文字の読み方と同時に書き方も教える。学生は文字を書いて覚える。このときの書くという作業は、与えられた文字を書き写すことであって、文字の形態を覚えるためには必要な作業である。しかし、このときの書く作業は思考内容の表現を伴っているとは言えない。書き取りという作業も、音声を文字に変える作業であって、これも文字学習上必要ではあるが、学生自身の思考内容の表現そのものでないことにはかわりはない。要するに、口頭表現の練習と読解のための文字学習だけでは文字表現の基礎能力は養われないのである。では、文字表現の基礎能力はどのようにして養成されるか。

1. 文字によって表現する練習

(1) 実物、模型、絵などを示して、それに相当することばをひらがなで書かせることから始める。

(2) 音声言語の練習として行なう口問口答の答の部分を書かせる。口頭で行なう句型練習を文字で行なうこともできる。

(3) あらゆる機会をとらえて書かせる。住居から学校への道順を口で言わせるばかりでなく、地図を書かせ必要な目標・駅名・停留所名などの文字を入れさせる。このような練習によって、学生は平素目にふれる文字に注意を向けるようになる。

(4) 欠席・早退なども口頭のみでなく、文字で書いて提出させるようにする。

(5) 教科書の文の完全な写しを提出させる。これによって文字とともに句読点などを正確に使うことを覚えさせる。

(6) 筆記試験で、あいたところにことばを入れさせる問題を出すときも、記号や数字を使わないで文字を書き入れるように指定する。

以上述べた方法は、ひらがな・カタカナを習った段階で始める。こうして、文字を情報を受ける手段としてのみでなく、送る手段として使う習慣を育てていく。

2. 語句による表現練習

(1) ことばを与えて短い文章を書かせる練習

これは一般によく行なわれている。

(2) 語句の解釈・定義を書かせる

基本的な語句の解釈を書くことはむずかしくて、初級の学生に行なわせることはできないが、中級になると、教科書の中の術語的なことばの定義や慣用語の解釈などを書かせる。たとえばつぎのようなものである。

つゆどき、いん石、黒潮、校正

ふところ手をして暮す、耳学問、焼け野原、芸は身を助ける

この練習は、語句の意味を正確に把握させると同時に、文法的に正しい文を書く能力を育てるのに役立つ。

(3) 漢字熟語複合語の書きのぼし

つぎに示す例のように、複合要素の漢字熟語はそのままにして、助詞・動詞などを加えて書きのばす。

海外援助 → 海外への援助， 海外へ援助を送る

入試終了直後 → 入試が終了した直後に

積極的交通事故防止方法 → 積極的に交通事故を防止する方法

この方法も問題の語の意味に対する理解を調べると同時に、特に中国語を母語とする学生に助詞の正しい使い方を練習させるのに効果がある。

(4) 類義語を並べておいて、それぞれを使って例文を書かせる

行く・歩く，捨てる・投げる，言う・話す，置く・残す，やめる・中止する，うれしい・たのしい・よろこぶ

3. 短文作成

(1) その場で見たこと，聞いたことをそのまま書かせる。主として、初級を対象とする。1. (1) では単語を書かせるが、これは文を書かせる。数枚の絵・写真，教師の一連の動作などを見せて、またはテープに録音された効果音を聞かせて、それを簡単な文で表現させる。絵の勉強でデッサンを重視するのと同じである。因果関係(ので・から)，条件(と・とき・たら・なら・ば)，動作の進行と状態(ている・である)，並行して行なわれる行為(ながら)などを表現する文を書かせることができる。この練習は、学生が観察したことを情報の送り手として書くということに意義がある。

(2) 未完成文の完成

文の前段を与えて後段を書かせるものである。初級程度で接続詞の使用を練習させる。中級では慣用的語句を含む文を練習させるによい。逆に後段を与えることもある。

いくらからだだがじょうぶだからといって、_____。

さすが歴史が古いだけあって、_____。

いまは _____ が、こうなるまでの苦勞がたいへんだった。

「だけあって」のみを与えて文を作らせると、「日本人だけあって日本語

がうまい」といった初級的な、ありきたりの文で逃げられてしまうことが多い。この方法ではそれを防ぐことができる。また、表現すべき内容にワクを与えて練習させるので、表現意図不明ということがない。

III 作文練習

1. 模倣作文

学生の発想によって作文を書かせるとき、しばしば当面する問題は、表現しようとする内容に比べて、語彙も構文力も足りないということである。作文練習にいきなり自由作文をやらせても、表現意図と表現能力との均衡がとれていないので、「こちらに東京がないの自然がたくさんです。もしければ私は北海道に住んで思いた。」(初級・中国語系)のように不完全な文しか書けない。このような文はいかに添削を念入りにしても、表現力として学生の得るところは少ない。そこで、構文力と語彙を十分に貯えるまでの作文練習としては模倣作文が有効である。教科書の課の文章にそって自己の立場で文を書かせる。全課にわたってもよいし、指示して一部について書かせてもよい。それによって文体と慣用表現を学ぶことができる。初級では、教科書中の対話にならって、一方を学生自身にした対話を書かせることもできる。中級では「日本人の食生活」に対して「わたしの国の食生活」を書かせるなどする。教科書の語句や構文を借用して文を書くことは、外国語の学習では有効な練習である。そのためには、読解学習のテキストが表現の手ごろな手本となり得るようなものでなければならない。語研でわれわれの作った中級教材は、その点を考慮して編集してある。高尚な内容のものを求める学生にとっては不満かも知れないが、やや通俗的なものが多いのはそのためである。中級程度であまりに高尚な、文学評論的、哲学的な内容のものばかり並べても、この段階での表現の手本としては不適であると考える。

2. 要約作文

やや長い文章の要約を書かせる。原文を読んで理解したところに基づいて、原文を見ながら作文するのである。主観をまじえず、原文を圧縮して表現するという作業を通じて、原文が内容をどのように表現しているかを学ぶことができる。中級では教科書の要約をさせるが、上級では読解テキストばかりでなく、新聞記事その他の課外材料を使うこともある。テレビ・映画などの内容について要約させることもある。

3. 読后感想作文

原文を見ながら書くことが許される点は要約作文と同じだが、この方は学生の主観的な感想を表現するので、批評的な立場に立つ作文と言える。

4. 体験作文

1から3までがテキストに基づく作文であるのに対して、これは学生自身の体験を表現する作文である。日記・手紙・報告・紀行などの形で書き表わされる。頼るべき原文はない。自己の貯えた語彙・構文力を発揮して文を書かなければならない。ここではじめて作文らしい作文とすることができるが、これまで1,2,3の練習で得たものが役に立つのである。

5. 思考作文

抽象的な思考を文に表現させる。随想・評論・学術論文・研究発表などがこれにはいる。文字表現の指導としては最高の段階である。学生によっては、創作を書かせてもよいと思う。

6. 補足

(1) 1から5まで列挙した作文練習は必ずしもその順序どおりに段階を追って練習させるということではない。初級の学生にも初級なりの体験作文を書かせることができる。学生にもそれを書く意欲があるだろう。ここ

で強調したいことは、それと並行して、1から3までのような作文練習をより多く行なわなければならないということである。それも作文という独立した教室作業の時間に行なうのではなく、読解の授業の中で常時行なうのである。表現能力というものは読解学習で得た構文力・語彙力などに支配されるのであるから、両者を切り離して行なうべきではない。

(2) 作文を書かせるに当って、つぎの点に注意しなければならない。

- ① はじめは、長い文を書こうとさせないこと。短くても正しい文を書くように努力させる。
- ② できるだけ短時間に書きあげる習慣をつけること。そのためには、数多くの練習を行なうこと。
- ③ 書く途中で、語句の意味や表記に自信が持てないときは辞書に当たってみることを励行させる。
- ④ 原稿用紙のワクの中に字を整然と書く習慣をつける。

(3) 外国語の文を与えて日本文を書かせる練習について一言したい。与えられた外国語の文が読解教材を基にして書かれた場合には、それを日本文に書き直す作業は模倣作文の一変形であると言っていい。そうでない外国語文を与えられた場合にも、自己の体験や思考を文にするのではないから、表現練習としては十分であるとは言えない。翻訳練習としてなら問題は別である。それについてはここではふれない。

IV 添削について

表現練習の指導が効果をあげるか否かは添削にかかっている。添削は表現指導の画龍点睛である。その添削について注意すべきことを述べておく。

1. 表現意図にそって訂正する。

誤りを訂正するときは、書いた学生の表現意図にそった方向に訂正しなければ効果はない。表現意図不明のときは、書いた本人に聞いてみなければ

ばならない。たとえば、ひじょうに単純な例であるが、「犬に散歩する」と書いた文があったとする。これを助詞の誤りと解して、「犬と散歩する」とすべきか、「犬に散歩をさせる」とすべきか迷うことがある。

2. 訂正から進んで推考を行なわせる。

上の例で本人の意図が「犬といっしょに」ということであつたら、いったんそれに従って訂正するが、原文の前後の関係からみて、「犬に散歩をさせる」の方がよくはないか、よりよい表現にするために推考させることも指導として大切である。

3. 訂正個所に注釈が必要なときはそれを書き、さらに必要なら例文も添える。

4. 訂正があまりに多いときは、もういちど書き直して提出させる。このときはじめて添削の効果が定着する。

5. 添削済みの作文は保存させて、ときどき復習させる。そのために、作文には必ず日付を書いておくことにする。

6. 添削しやすいように原稿用紙に書かせることをたてまえとするが、もしレポート用紙を使用するときは、一行おきに書かせる。

結 び

外国人の中には、日本語で自己の意志や思考内容を思いどおりに書き表わすことは、とうてい不可能だと、あきらめているものがある。そしてその理由として日本語に言語としての欠陥があるかの如く言うのである。こういう外国人は文字表現の指導を受けなかったにちがいない。あるいは、誤った指導を受けたのかも知れない。すなわち、表現能力の十分に備わらないうちに、高度の内容の作文を試みては失敗するという繰り返しの果て

に、上記のような境地に立ち至ったものと思われる。本稿で述べてきたように、基礎能力をまず養成し、読解授業と連係を保った作文練習を常時行なわせるならば、外国人といえども、名文とまではいかないまでも、達意の文を書き得ようになるのである。

終わりに、早稲田の留学生の書いた練習作文の例を掲載して、参考に供したいと思う。語句・文字・句読点すべて原文のままである。

要約作文の例

上級の読解教材として使った鳥崎敏樹著「心の風物誌」（岩波新書）の中の「女性と仲よし」を要約したもの。

女性と仲よし

中国系カンボジア人男性
(日本語学習歴2年強)

そこに山があるから、山に登ると名言を、はいたマロリーは、男だったからそういったので、女ではいわないと作者はいう。

山へ行くのもいろいろあるが、本当になぜ山へ行くのか？ 男達に聞くと、これは男性的性格である。忍耐力をきたえ、征服欲と、スリルを満足させるためという、この男性的登山は事業欲や認識欲と根は同じである。女性になぜ山に行くのかと聞くと、月並の返事と、その他、女らしいことに、山での生活が、よい思いでになるという。

一般に多くの女の人たちは自分から自分の未来をつくり出していく前むきの精神がうすく、日常的な毎日毎日の生活に定着した心情の方が濃いだから昔自分がであった、出来ごとや、ささいな事柄までしっかり覚えてとにかく精神の眼が前向きでない、女の人たちは過去を大切する。女のひとは、ひとりであるのが天性にあわない、女の子らしさが生れてくる年頃同性の「仲よし」が必ず出来そして特定の青年と仲よくなり、家庭をつくり、安住し、今度は子供が出来る子供と仲よくなって、夫は心理的に見かざられてしまいがちである。

普通は夫は夫で家などの念頭がなく事業や探究にうちこんでいるので苦にならない、しかしきまり文句にわが家へ戻っていく夫はおだやかであり活動的でない、性格や実直だが小心で味にとぼしい人柄が浮かんで安心できる人物だろうが、有能でなさそうに思う。

夫達のことは、それとして、仲よしムードの好きな女性と云うものが山で友達を作りやすいのかと云うと事実はまるで逆に「未知の友達になれる」のが理由で山に

行くと云う男達が結構いる。ようするに自分から未知の人間をさがしあてようという意欲と仲のいいひとと一緒にいたという感情とは本性がおよそ別らしいそうしてみると平生から仲のいい友達と一緒に山へいって平生より一層緊密でしっかりムードにひたりたいのが彼女達の山行きの正体なのだ。しかしあるおじょうさんが山で帰りの途中電車の中で若い山男と親しくなってそれからいくらかの交際後山好きの二人は結婚したという例がある。

山が一番好きな人でも女の人は変化のない平らな毎日毎日をじっとりと歩いていく女性の徳がそなわっている、結婚した二人がこれから先の生活で男は人生の岩場にぶつかった時、征服に生命をかけるし。女性は大地に根ざした生活を生きぬく資格を十分に持っているに違いない。

読后感想作文の例

前例と同じく「心の風物誌」中の「気にかかる服装のはなし」について読後感を書いたもの。原文は縦書き。文中カッコにはいった漢字は、活字にない誤字を正したもの。

「気にかかる服装のはなし」について

アメリカ人(日系3世)女性
(日本語学習歴2年)

島崎敏樹さんの散文はある部分を賛成しますが、ほかの文章に(対)して言いたいとすることがあります。例えば「緑のおばさん」の所で、横切ろうとした緑のおばさんが、無残な事故の原因となったのは、緑の服を着ていたから、赤と青の信号による反射的な感(覚)がわざわざしたといっておりますが、それだけでは理由になりません。緑とゆう色は島崎さんが書いているように後退的な色ですが、それよりも心理的な意味を持っていると思います。というのは、緑は安全の意味がありますから子供達の為に「安全のおばさん」の意味を出す為に選んだのでしょうか。昔から人間は緑の所に居れば安全な気持が出て来たのですが、現代の大都会の生活はあまりに複(雑)になってきてしまったので、そうゆう原始的な反応が分からなくなってしまったのです。特にタクシーの運転手は生きる為にほとんど機械(的)になるはずです。赤と青はもう色ではなく「止」と「行」の印であります。

日光のはなしで中年の女の人は燃えているような紅葉を見て「まあすごい」と感嘆するのは、ただ色の質を見てではなく量の関係もあると思いますが…。大都会に住む人々には色の質がわからなくなり、秋になって日光まで行って、沢山ある紅葉を見なければ本質的な赤は分かりません。でも消防自動車と夜光テープを例とすれば、赤は都会の中にもやっぱりまだ危いとゆう意味があります。

心理学的に見れば赤は火の意味があって昔から危い感じを出します。がそれだけでは説明になりません。「危い」が「止」という意味があればなぜ日本では郵便ポストが赤色なのでしょう。赤が物理学的に波長が長いから目立つ色だからでしょうが、それでも妙な感じがします。都会に住む人々が機械的になったと分れば結論することが出来ます。例えば黄色は信号として赤と青の中間にありますから「危い」と「注意」とゆう反射になります。そうしますと学童のあざやかな黄色の帽子は大変良いことです。物理学的にも良く目立つ色ですから。

日本で、外国より服装の問題があるのは年の関係が原因です。外国では「緑のおばさんのような人は赤か黄色のどんだら模様のを着てもかまいませんが、日本では考えられないことらしいです。この複雑なやこしい問題を含んだら「緑のおばさん」を見えるように工夫する為が一番よい方法は、多分島崎さんが書いているようにベルトをつけて帽子をかぶることでしょう。

後半の所ではただ趣味の事だから、ちょっと言いにくいですが、服装は難しい事だとだれでも、目が有る人は分るはずです。しかし国によって、型によって、柄にもよって色の心理的な意味が違います。黒は下へ沈む効果があっても細く見える可能性があります。ですから女性にも男性にも黒を着たら、スタイルが良ければ、非常にスマートに見えると思いますが、悲しみや神秘的なニュアンスもありますから服装の着方と身体の持方が大切だと思います。同じ洋服でも着方又は布地によって下品にも高級にも見えるものです。つまり色だけを話せば服装の判断は出来ないと思えますが。

体験作文の例

現場実習に行くため授業を欠席する学生に実習中の日記を書かせたものである。原文は縦書き。

実 習 中 の 日 記

マレーシア人男性
(日本語学習歴4年)

晴 十二月二日

今日は初出勤だ。七時半に現場に到着した。すぐに作業服のとりかえにかかった。日本では大学生たちがデモする時はヘルメット(安全帽)をかぶっています。けれども、僕がかぶるのは、現場で安全を確保する為です。ヘルメットをかぶるのは、実に今日が初めてです。

午前八時前に船橋教授と一緒に現場で所長磯谷さんにあいさつをした。八時に現場事務所の事務員と協力者等全員で朝礼をした。その時、体操のあと、本日の予定を話し合った。最後、僕が現場で実習することについて磯谷所長さんによって現場

の人達に紹介された。その時彼らはあたたかい拍手で迎えてくれた。マレーシアさん頑張れ、大きな声が聞こえた。彼らは僕に対して、温い気持で迎えてくれたのだ。この感激は一生忘れられないことであろう。私は何を言ったらいいのかが自分で全然わからなくなってしまった。とにかく、この一か月間、彼らと一緒に一生懸命頑張らなくてはならない。

晴 十二月四日

今日はコンクリート打ちの日だが、平常より一時間早く出勤した。だから七時前に出勤した。コンクリートを打つ場所はC棟二重スラブだ。生コンクリート車約百台ぐらい。生コンクリートを打つ前に我々工事監督が注意しなければならない事は例ば、型わく工事はでこぼこになってはいないか、板と板間に穴があいてはいないか。そうゆう事をよく検査しないとイケない。

現場の規則は、午後十二時から一時まで昼食休み。三時から約三〇分ぐらい下請と事務所技術者打合せ会議である。あすの工事について打合する。仕事は五時で終り、残業の場合もある。しかし、僕の場合は実習生であるから五時でやめても良いことになっている、けれどもほかの人達はまだ一生懸命に仕事をしているのに、僕もいっしょに八時まで残業をした。

晴 十二月五日

昨日は生コンクリートを打ち込む為に七時前に出勤した。今日はいつもの通りに八時頃出勤する。すぐに作業服にとりかえて、朝礼体操を始めた。何かしらないけれど、昨日一日働きとうしたので、今日は体全体が痛くて、本当に働きたくなかった。まあ、仕事だ、しかたがない、僕達は工事監督なので、毎朝現場の全体を一度見廻らなければならない。僕はやっぱり新人なので、いくら学校で勉強しても、現場の事は仲々わかりにくい、そして、面倒だけれど図面を持ってわかないところがあったら、図面を見ながら検査する。今日の仕事はC棟に鉄筋を配筋する予定です。

午後からC棟に墨を出す。それは壁とブロック壁を作る為にしなければならぬ。初めは簡単と思ったけれど案外墨を出す仕事は一日ぐらいかかった。

雨 十二月八日

今日は木曜日だ、午後から出勤すると約束したが、午前中は学校で材料実験があったので、午後一時頃現場に到着して、すぐ所長さんに報告して、現場へ仕事をしようと思った。「デービッド君どこへ行きますか、雨の日は仕事をしないのだ」と所長さんに言われました。なるほど、雨の日には下請人達が現場へ来ない、何の仕事も出来ない、しかし、僕達は仕事しなくても、事務所にいなければならない、それで今日は一日中事務所に行った。本当にひまだ、仕事は五時で終わった。

晴 十二月九日

現場の仕事は一日おくれても、大変な事です。例ば、昨日一日雨で、仕事が休みだった。今日、する事はぐんと一杯になる。本当に建設工事は波のようなものだ。きょうは排水とコンクリートの上を掃除した。コンクリートシュートの片付、B、F 墨出しとスリーブを入れる。以上の事の中で一番面倒な事はスリーブを入れることだ、スリーブの寸法は決めてあるので、上下左右、少しでもちがえば、もう一度やりなおさなければならない。特にB、Fはスリーブが数十個ぐらいある。完了するまで、大方二日間ぐらいかかるだろう。

今日三時の打ち合せの時、所長さんが突然後から声をかけて、「あした六時からきみの為に歓迎会をするから、出て下さい」と言った。僕が現場で実習することは始めてです、けれども、僕の為に歓迎会を開くことはどういいうわけだろう。

晴 十二月十日

土曜日だ、官庁は殆ど半日で終りなので、虎の門附近は車が普通よりこんでいた。それで、現場についてた時は平日の現場の停車場は車が四、五台しかないが、今日は十数台車がとまっていた。それで、土曜日の現場仕事は非常に不便だ。特に生コンクリートを打ち込む日は生コンクリート車が仲間来れなくなってしまうので、なにしろ大変な事だ。

午前中から午後にかけての仕事はやっぱり昨日の残りの仕事だ。鉄筋を配筋するとスリーブが十数個残っている、一階の型わく、もう少し。五時まで、全部終わった。

六時から、僕の為に歓迎会が始まった。作業所の職員全員出席した。全部三十名以上集まりました。先ず所長さんが僕の実習のことについてあいさつされ、激励のことばを下された、次に僕は感謝のお礼のことばを述べた。歓迎会は非常に楽しく十時頃終わった。